

2019年2月17日

福音書からのメッセージ

イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。

(ルカによる福音書6章17節 a)

幼稚園の子どもたちに「神さまってどこにいますか？」と聞くと、上の方を指さす子がいます。わたしたちの中にも、何となく神さまは上の方におられるのではないかなという思いがあるようです。主の祈りでも「天におられる」と呼びかけるわけですから、あながち間違っているとはいえないでしょう。ではイエス様はどうでしょうか。わたしたちに対してどう関わろうとしておられるのでしょうか。考えていきたいと思います。

今日の聖書の中に、「貧しい人々は、幸いである」という言葉があります。この言葉を聞いて、「山上の説教」を思い浮かべる方も多いでしょう。山上の説教とは、マタイによる福音書の5章から始まるイエス様の教えです。しかしこのルカ福音書の箇所は、内容こそよく似ているのですが大きな違いがあります。

今日の箇所は、「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった」という描写から始まります。山から下りたのだから、この説教は平地でおこなわれたわけです。山の上におられたイエス様が人々の間に下りて来られ語られたというイメージを大切にしながらみ言葉に触れていきたいと思います。

イエス様の元には、たくさんの人たちが集まってきました。その中には病気の人も、汚れた霊に取りつかれた人もいました。もしもイエス様が山の上のままでいたら、どうなっていたでしょう。多くの人はいずれもイエス様の元に行ったことでしょう。でも、どうしてもいけない人もいたと思います。イエス様が山から下りた意味、



それは今、人々がいる場所に自らが行かれたということなのです。

イエス様は上の方からわたしたちを眺め、「あなたたちはこうなりなさい」という一般的な話をされたのではありません。山から下り、そこにいる一人一人の間に立ち、手を伸ばし、目と目を合わせ、声を掛けていかれる。それがこの場面で描かれるイエス様の姿なのです。

そばにまで来てくれるから、その呼びかけはとっても具体的です。イエス様は一人一人のそばに来て、「貧しい人よ」、「飢えている人よ」、「泣いている人よ」と語られます。わたしたちと同じ目線にまで下りて来て、わたしたちの表情を、状況を、痛みをすべて理解して、一人一人に声を掛けられるイエス様を感じましょう。

2000年前、イエス様の元に集まってきた人たちは、貧しさの中で飢え、悲しみのただ中にいました。神さまにすがりしかかない、その思いでイエス様の元に集まってきました。そのすがり人たちこそ、「幸い」なのです。

わたしたちもまた神さまにすべてを委ねるとき、自分の弱さをさらけ出し、神さまにすがるとき、「幸いなるかな」という祝福の宣言がわたしたちの心の中にも響くのではないのでしょうか。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>